

## 中央構造線周辺地域における考古学の遺跡で検出された地震の痕跡

### Traces of paleo-earthquakes found at many archaeological sites along the Median Tectonic Line

# 寒川 旭[1]

# Akira Sangawa[1]

[1] 産総研 活断層研究センター

[1] Active Fault Research Center,GSJ/AIST

四国から紀伊半島西部にかけての中央構造線に沿って顕著な活断層が発達し、断層活動を繰り返している。

一方、この地域には考古学の遺跡調査から過去の地震における強い地震動を示す痕跡が多く検出されており、この中に中央構造線の活動を示すと思われるものも含まれている。

四国東部の吉野川下流の沖積低地では多くの遺跡から様々な年代の液状化現象の痕跡が認められている。これらの多くは、この地域を繰り返し襲っている南海地震の痕跡と考えられる(寒川, 2001 など)。例えば、神宅遺跡は1854年の安政南海地震、中島田遺跡は1361年の正平南海地震、そして、宮ノ前遺跡・古城遺跡などは1498年の明応東海地震に対応する南海地震跡と考えられる。この他、黒谷川古城遺跡などでは16世紀末頃の液状化跡が見つかり、「津波地震」とされる1605年の南海地震よりも、むしろ、四国東部の中央構造線活断層系の活動による痕跡の可能性が高い。トレンチ調査からも、この年代の断層活動が示されている(岡田, 1992; 森野他, 2001 など)。

四国中央部では、唯一、東予市の幸ノ木遺跡で12世紀以降の顕著な液状化跡が認められており、中～近世の南海地震、または、中央構造線活断層系の爪痕と考えられる。

紀伊半島西部では、和歌山市の川辺遺跡で7世紀後半頃の液状化跡が見つかり、684年の南海地震を示すと考えられる。

一方、京阪神・淡路地域では1596年の伏見地震によると考えられる痕跡が多く検出されている(寒川, 2001 など)。この地震は有馬一高槻構造線活断層系などによって引き起こされたことがトレンチ調査から判明している。痕跡の中には、京都盆地南部の木津川河床遺跡のような大規模な液状化跡、今城塚古墳や西求女塚古墳のように大型古墳墳丘の顕著な地滑り跡、玉津田中遺跡のように砂礫層の液状化跡など顕著な地変が示され、この地震によって広い範囲で激しい地震動が生じたことがわかる。

中央構造線活断層系の活動に関しては、このような顕著な地変を示すものが、まだ検出されていない。将来、多くの痕跡を収集することによって、地震動の特徴や、地盤災害の広がりについて言及することを目指したい。